

図 5-17 呼吸器系

2 急性咽頭炎・扁桃炎

のどの痛みを主症状とする。溶連菌によるものとはときに発しんを伴い、抗菌薬の投与を要する。また、アデノウイルスによるもので結膜炎を伴った場合、「咽頭結膜熱」（プール熱）とよばれ、主要症状が消失したのち2日間は登園・登校が禁止されている。

3 急性喉頭炎（クループ症候群）

喉頭が腫れて犬が吠えるような特有のせき（犬吠様咳嗽）と呼吸困難を呈することがある。

4 細気管支炎

RSウイルス、ヒトメタニューモウイルスなどの感染症で引き起こされることが多い。喘息様のゼイゼイした呼吸、激しい咳嗽などを認め、症状に合わせた薬を飲む。RSウイルスは年齢が低いほど重症化しやすい。一方で、保育所職員や年長児が罹患したときは軽いかぜ程度の症状となる。

5 喘息性気管支炎

かぜをひいたときに喘鳴を繰り返す病態は、喘息性気管支炎とよばれることがある。これは慣用的に使われてきた用語で、気管支喘息との境界が明確ではなく、独立した疾患単位ではない。多くは年齢とともに改善する。治療や対応は気管支喘息に準じる（p.97 参照）。

6 扁桃肥大・アデノイド肥大

口蓋扁桃やアデノイドはリンパ組織の1種で、小児期に発達するため、扁桃肥大やアデノイド肥大になりやすい。呼吸困難や繰り返す発熱、閉塞性睡眠時無呼吸症候群などを認めるときは手術を検討する。

D. 消化器の病気

1 急性胃腸炎

腹痛、嘔吐、下痢が主症状である。ウイルスが原因になることが多いが、細菌が原因のものもある。ウイルスで多いものはロタウイルス、ノロウイルスである。ウイルス性胃腸炎には特効薬はなく、脱水の回避が重要である。病原ウイルスは、長期間便中に排出されるため、すべての期間を登園停止にすることは現実的ではない。おむつ替えなどときには扱いに注意が必要で、次亜塩素酸ナトリウムでの消毒が推奨される。細菌性なものにはカンピロバクター、病原性大腸菌、サルモネラなどがある。

2 肥厚性幽門狭窄症（図 5-18）

胃の出口の幽門の筋肉が肥厚する疾患で、生後2・3週間～3か月ごろまでの乳児に多い。胃から十二指腸にミルクが流れ出ないため、噴水状の嘔吐を繰り返し、体重が増えなくなる。手術になることもある。

3 腸重積症（図 5-18）

おもに生後3か月～2歳ころまでにみられる。管状の腸がある部分でめり込んでしまう病気で、短い時間で繰り返す嘔吐（間歇的嘔吐）、嘔吐、血便を呈する。めり込んだ部位の血液循環が悪くなり、時間が経つと孔があく可能性があるため迅速に医療機関を受診する必要がある。

*嘔吐：大声で泣くこと。

4 急性虫垂炎（図 5-18）

盲腸先端にある虫垂に炎症が起き、へそまわりの痛みからはじまり次第に右下腹部の痛みとなる。歩くと痛みがひびいたり熱が出ることもある。早めの受診がすすめられる。抗菌薬の投与または手術を行う。

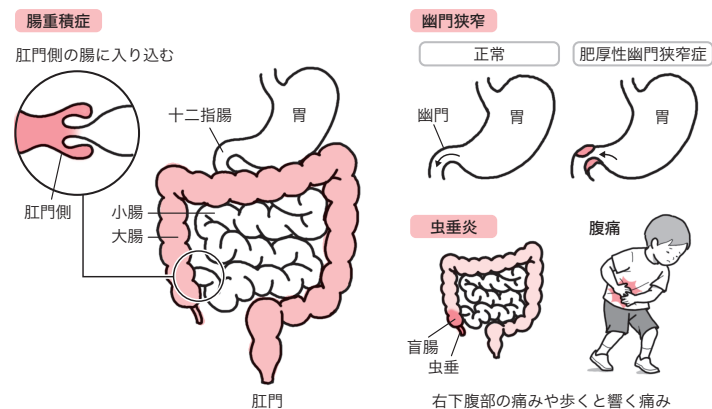


図 5-18 肥厚性幽門狭窄症、腸重積症、急性虫垂炎